

健康高齢者のコミュニケーションに関する介入研究

An intervention study about the communication of the healthy elderly adult

宮田正子¹⁾・孫琴¹⁾・高木千都²⁾・高橋伸子¹⁾・坂口佳江¹⁾・吉村昌子¹⁾・石川真理子¹⁾

MIYATA Masako¹⁾・SUN Qin¹⁾・TAKAGI Chisato²⁾・TAKAHASI Nobuko¹⁾・

SAKAGUCHI Moshe¹⁾・YOSHIMURA Masako¹⁾・ISHIKAWA Mariko¹⁾

(立命館大学¹⁾・アプリーシエイトグループ株式会社²⁾)

(Ritsumeikan University¹⁾・Appreciate Group Company Limited²⁾)

key words : コミュニケーション, 健康高齢者, 学習活動

はじめに

先行研究では、音読・計算を反復遂行する学習活動により、健康高齢者の認知機能の様々な側面の改善あるいは維持することが明らかになったが、日常生活という側面からの介入研究は、極めて少ないという現状である。そこで、本研究では、学習活動における学習者のコミュニケーションへの影響があるかどうかを検討するために、学習活動に参加する前と学習活動に参加した9ヶ月後の時点での健康高齢者の学習活動中の行動をDVDカメラで撮影し、観察および行動分析を行うことである。

方法

実験参加者

学習活動に参加した健康高齢者2名(平均年齢=75.2歳)であった。2008年6月16日から6月27日の間にプレの撮影が行われ、2009年2月2日から2月6日の間にポストの撮影が行われた。撮影はDVDカメラを用いて行われた。1つのテーブルにつきカメラは1台用意され学習者2名とサポーターが映るように配置された。

分析機材および分析方法

行動の分析には、パーソナルコンピューターにてTHOMSON社製の行動コーディングシステムBecoを使用した。行動コーディングシステムは対象者の行動が生じた回数や時間2つの行動が重複(同時生起性)した時間を計測できるものであり、その平均や分散を統計的に算出することができるものである。学習中の対象者に多く見られた行動を行動カテゴリーとして設定した。評定は2人の評定者によって実施され、一致率が80%を超えるまで計数し、信頼性を高めた。また、計測する学習時間は、学習者が学習室に入室し指定されたテーブルの椅子にかけた時点を学習開始時間とし、課題を終え椅子から立ち上がった時点を学習終了時間とした。

倫理的配慮

研究を開始する前に、本人に介入研究の目的と安全性について説明を行なった後、書面による同意を得た。

結果と考察

(1) 学習体制が1対1のケース

学習体制が1対1のケースのプレとポストにおける30分あたりの行動の生起回数の変化(生起回数×1800(秒)/学習時間(秒))を図1に示した。図1から、他の学習者が話している項目、学習者が他の学習者に話している項目、学習者が他の学習者に視線を向けている項目は増えた一方、サポーターが話している項目、学習者がうなずいている項目、及び学習者がサポーターに話している項目は減ったことが確認された。これらのことから、学習活動に参加した学習者は、自ら積極的にコミュニケーション行動を行ったと考えられる。

うなずいている項目、及び学習者がサポーターに視線を向けている項目は減ったことが確認された。これらのことから、学習活動に参加した学習者は、ある程度のコミュニケーション行動が増えたと考えられる。

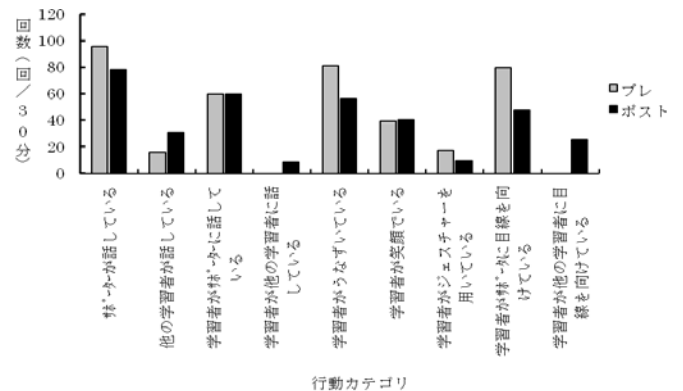


図1 Aさんのプレ・ポストにおける生起回数の変化

(2) 学習体制が1対2のケース

学習体制が1対2のケースのプレとポストにおける30分あたりの行動の生起回数の変化を図2に示した。図2から、他の学習者が話している項目、学習者が他の学習者に話している項目、学習者が他の学習者に視線を向けている項目は増えた一方、サポーターが話している項目、学習者がうなずいている項目、及び学習者がサポーターに話している項目は減ったことが確認された。これらのことから、学習活動に参加した学習者は、自ら積極的にコミュニケーション行動を行ったと考えられる。

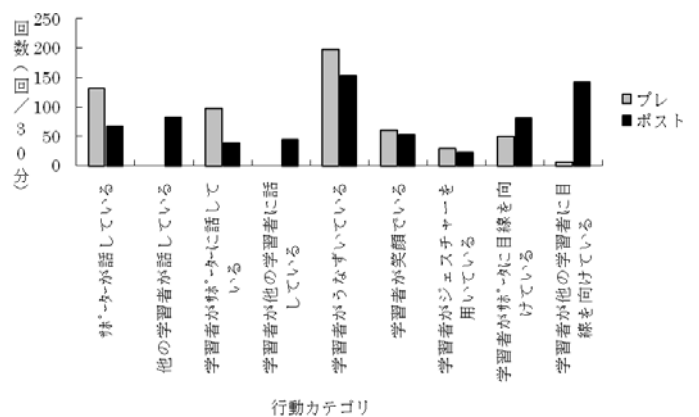


図2 Bさんの行動生起回数の変化